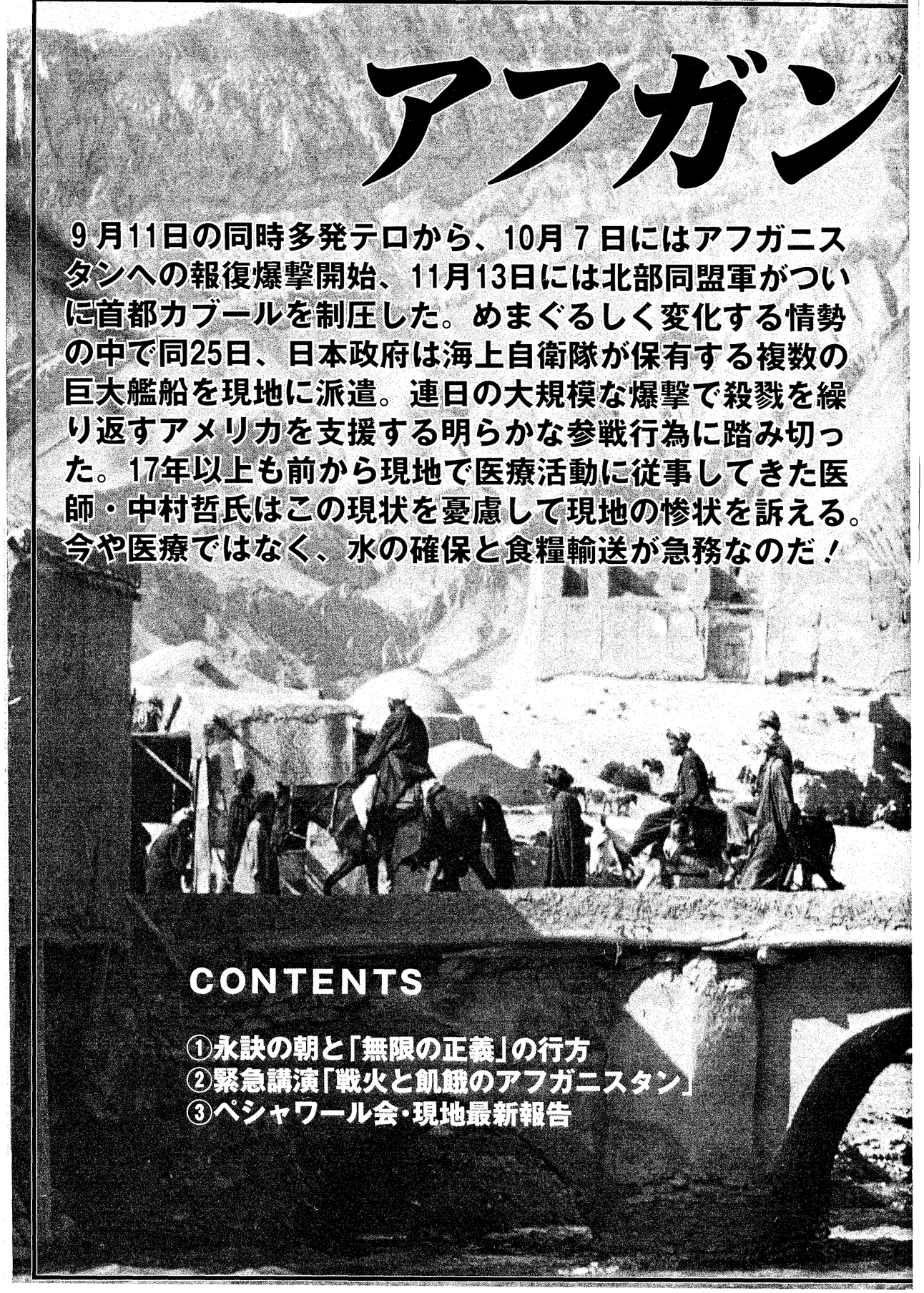
アフガン戦争と日本の行方

全特集 ドクター中村のパキスタン・アフガン医療奮戦記

9月11日の同時多発テロから、10月7日にはアフガニスタンへの報復爆撃開始、11月13日には北部同盟軍がついに首都カブールを制圧した。めまぐるしく変化する情勢の中で同25日、日本政府は海上自衛隊が保有する複数の巨大艦船を現地に派遣。連日の大規模な爆撃で殺戮を繰り返すアメリカを支援する明らかな参戦行為に踏み切った。17年以上も前から現地で医療活動に従事してきた医師・中村哲氏はこの現状を憂慮して現地の惨状を訴える。今や医療ではなく、水の確保と食糧輸送が急務なのだ！



CONTENTS

①永訣の朝と「無限の正義」の行方
②緊急講演「戦火と飢餓のアフガニスタン」
③ペシャワール会・現地最新報告

★「私たちは帰ってきます」――米テロ事件そして報復

永訣の朝と「無限の正義」の行方

中村 哲 氏
NGO「ペシャワール会」現地代表 医師
なかむら・てつ 1946年福岡生まれ

九州大学医学部卒業後、国内の診療所勤務を経て84年、パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以後17年間、貧困層の診療活動に従事してきた。著書に『ペシャワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』『医は国境を越えて』（石風社）、『アフガニスタンの診療所から』（筑摩書房）などがある

二〇〇一年九月十三日、私は米国の報復近しと聞き、帰国予定を急遽変更して、再びアフガニスタンのジャララバードに入った。強い「邦人退去勧告」がパキスタンの日本大使館から出され、やむなく日本人抜きの現地プロジェクト継続を図るためである。この三日前まで実はカブールにいて、巨大な難民キャンプと化した同市の五つの診療所を強化すると共に、新たに五ヶ所を増設することにした。

更に東部一帯で進められていた水源確保（井戸・灌漑用水路）の作業地をも、現在の六六〇ヶ所から年内に一〇〇〇ヶ所に拡大、予想される餓死者数百万と云われる未曾有の旱魃（かんばつ）に対して、可能な限りの対策を準備して帰国しようとしていた矢先である。九月十一日のニューヨークにおけるテロ事件は、寝耳に水の出来事であった。

しかし大規模な軍事報復を予想して、車両・機材を安全地帯と思える場所に移動させ、薬剤はPMS（ペシャワール会医療サービス）の最初の診療所があるダラエ・ヌール渓谷に移し、数ヶ月の籠城に耐えうるように指示した。五ヶ所に診療所をもつカブールには伝令を送り、ペシャワールに家族がある職員はペシャワールの本院に戻らせ、カブール市内に家族のある者はその意思に委ねた。

旱魃対策の要であった水源確保の事務所はジャララバードに置かれており、若い日本人ワーカーたちもここに寝起きしていた。「PMS・水対策事務所」の職員七四名は、金曜日の休みであったにもかかわらず、同日午前七時に異例の招集をかけられて集結していた。

意外に町は平静であった。その静けさが異様でさえあった。黙々と日々の営みが行われていたが、それは事情を知らないからではない。相変わらずBBCはパシュトゥー語放送で米国の実情を伝え続けていたし、職員の誰もが日本人大衆よりは驚くほど正確に事態を判断していた。実際、ジャララバードには三年前も米国の巡航ミサイル攻撃が集中した。今度は更に大規模な空爆が行われるだろうとは百も承知の上でのことである。

粛々と何かに備えるように……といっても、米国憎しと戦意をたぎらすわけでもなく、ただひたすらその日を生き、後は神に全てを委ねると述べるのが精確であろう。緊迫した決意であっても、そこに騒々しい主張や狼狽はいささかも感じられなかった。

私は集まった職員たちに手短に事情を説明した。「日本人ワーカーを帰すべき言い訳を述べ、かつ士気を保つように」との水源確保計画担当の蓮岡の求めだったが、感傷的になっていたのはおそらく私の方だったろう。

「諸君、この一年、君たちの協力で、二十数万名の人々が村を捨てずに助かり、命をつなぎえたことを感謝します。今私たちは大使館の命令によって当地を一時退避します。すでにお聞きのように、米国による報復で、この町も危険にさらされています。しかし、私たちは帰ってきます。PMSが諸君を見捨てることはないでしょう。死を恐れてはなりません。しかし、私たちの死は他の人々のいのちのために意味を持つべきです。緊急時が去ったあかつきには、また共に汗を流して働きましょう。この一週間は休暇とし、家族退避の備えをして下さい。九月二十三日に作業を開始します。プロジェクトに絶対に変更はありません」

長老らしき者が立ち上がり、私たちへの感謝を述べた。

「皆さん、世界には二種類の人間があるだけです。無欲に他人を思う人、そして己の利益を図るのに心がくもった人です。PMSはいずれかお分かりでしょう。私たちはあなたたち日本人と日本を永久に忘れません」

これは既に訣別の辞であった。

家族をアフガン内に抱える者は、誰一人ペシャワールに逃れようとしなかった。その粛然たる落ち着きと笑顔に、内心何か恥じ入るものを感ぜずにはおれなかった。再会する可能性がないと互いに知りつつ敢えてカブールへと旅立つ一人の医師を、「神のご加護を」と抱擁して見送った。

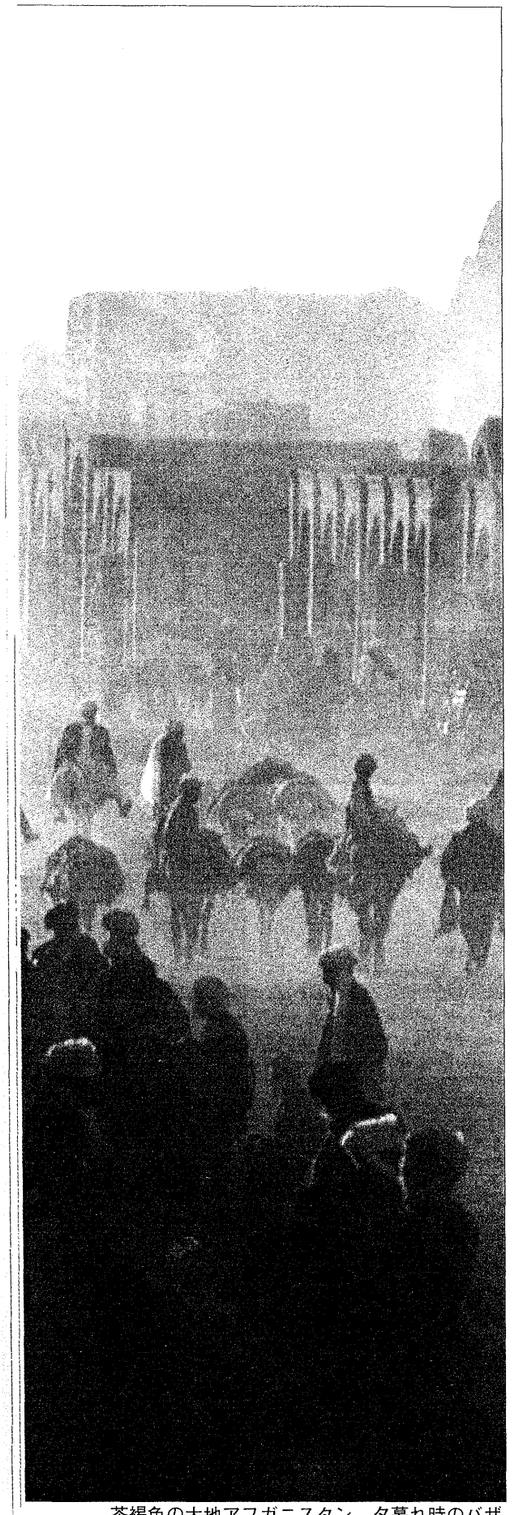
※

帰国してから、日本中が沸き返る「米国対タリバン」という対決の構図が、何だか作為的な気がした。淡々と日常の生を刻む人々の姿が忘れられなかった。昼夜を問わずテレビが未知の国「アフガニスタン」を騒々しく報道する。ブッシュ大統領が「強いアメリカ」を叫んで報復の雄叫びをあげ、米国人が喝采する。湧き出した評論家がアフガン情勢を語る。これが芝居でなければ、みなが何かに憑かれているように思えた。私たちの文明は大地から足が浮いてしまったのだ。

全ては砂漠の彼方にゆらめく蜃気楼の如く、真実とは遠い出来事である。それが無性に哀しかった。アフガニスタン！ 茶褐色の動かぬ大地、労苦を共にして水を得て喜び合った村人、井戸掘りを手伝うタリバン兵士たちの人懐っこい顔、憂いをたたえて逝った仏像……尽きぬ回顧の中で確かなのは、漠々たる水なし地獄の修羅場にもかかわらず、アフガニスタンが私に動かぬ「人間」を見せてくれたことである。

「自由と民主主義」は今、テロ報復で大規模な殺戮戦を展開しようとしている。おそらく、累々たる罪なき人々の屍の山を見たとき、夢見の悪い後悔と痛みを覚えるのは、報復者その人であろう。瀕死の小国に世界中の超大国が束になり、果たして何を守ろうとするのか、私の素朴な疑問である。（二〇〇一年九月二十二日）

【石風No.18 2001・10】



茶褐色の大地アフガニスタン。夕暮れ時のバザールは黄塵に煙り、人々は家路をたどる

◆石風社＝〒810・0074 福岡市中央区大手門1丁目8番8号☎092・714・4838

★現地の実情を赤裸々に伝える誌上講演！

戦火と飢餓のアフガニスタン

▲本場で講演する中村医師。会場にはゴミ箱の余地もないほどの聴衆で埋まり、身動きもとれないような状況だった

私どもが現地に行ってから十七年半になります。この間、いろんなことがありましたが、現地はまことに紛争の絶えないところで、しかも、実際に行ってみないと実情がなかなか分からない国の一つです。私たちは同じようなスタンスでずっと活動を続けてきましたが、今回日本に帰ってきて驚いたのは、もちろん米軍の爆撃にも驚きましたけれども、あまりにもアフガニスタンの実情が伝わらないまま、何かが大きく動き始めているということでした。私たちが現地の実情をお話しすると、それに対して「中村先生はタリバン派ですか」とか（場内笑）、とんでもない言葉が返ってきたりして、まさに隔靴掻痒の感があります。

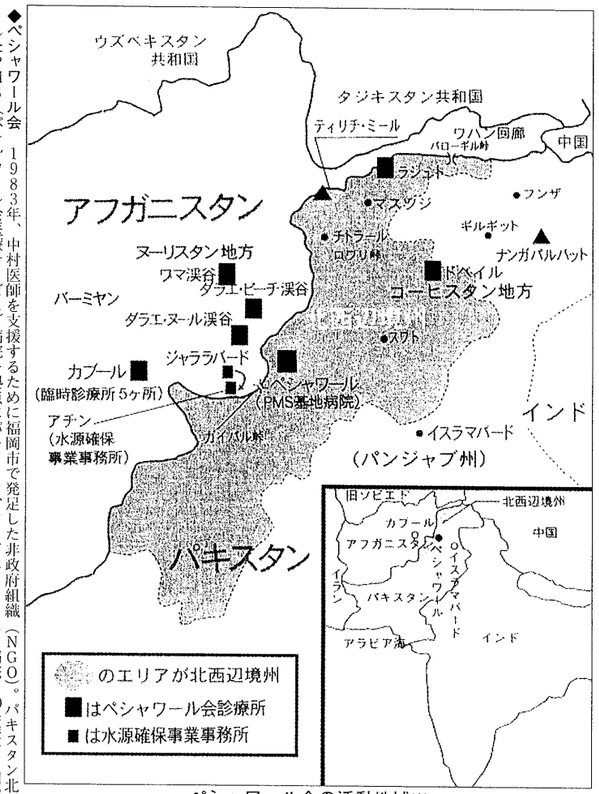
現地の実情を知って冷静な判断を！

日本中がまるで狂ったように、正しい情報もないまま、今までとは違う方向に流されているという感じがします。脅迫電話がかかってきたこともありました。今日お集まりの皆さんの中にもいろんな政治的立場や職業の方がおられるでしょうが、私の短い話で全体像はとうてい伝えきれないとしても、少しでも現地の実情を知って、どうか今回の事態を冷静に見て判断していただきたいと思います。ということを先日、国会で申し上げたところ、「その言葉は取り消せ」と言われました。

それぐらい、日本中が何かに取り憑かれているような感じがします。実は私は、皆さんお信じにならないでしょうが、対人恐怖症の傾向がありまして（場内笑）、人前で話すのは苦手なんですが、私が見たことや聞いたこと、してきたことを率直にお話しします。私たちの十七年間の活動をそのままご報告する形で、スライドを適宜ご覧に入れながら、皆さんの理解に供したいと思います。★【本文中の写真は当日使用されたスライドとは必ずしも一致しない。掲載写真中、ペシャワール会のホームページから転載したものには※印、講演中のスライド映写の指示箇所には★印を付した／編集部】

私どもの「ペシャワール会」は、一九八三年に結成されて現在に至っています。アフガニスタンの地理の説明にはこれまで苦労しましたが、今は新聞やテレビの報道で頻繁に地図が出てきますから、皆さんもうよくご存じだと思います。ペシャワール会は、名前の通りパキスタン北部の、アフガニスタンとの国境にほど近いペシャワールという街を拠点に、アフガニスタン内に八つとパキスタン内に二つの診療所を持っていまして、現地スタッフが二百二十名、そのうち日本人ワーカーが七名います。あとでお話ししますが、アフガニスタンはここ二、三年続いている大旱魃で瀕死の状態で、私どものほうでも水源確保のプロジェクトを進めていまして、総勢七百名で頑張っているところです。★

ペシャワール会は福岡に本部を置いていますが、すべてボランティアでみかじめ（管理、監督）をしています。



ペシャワール会の活動地域※

◆ペシャワール会　1983年、中村医師を支援するために福岡市で発足した非政府組織（NGO）。パキスタン北西部のペシャワールに設置したPMS（ペシャワール会医療サービス）病院を拠点にパキスタン、アフガニスタンに1病院と10診療所を開設し、年間20万人を診療中。昨年夏からは水源確保事業、今年10月からはアフガニスタン国民への食糧配給事業も開始した（同会事務局☎092・731・2372）

運営資金は設備投資を入れて年間約一億円で、そのうち八〇数％はすべて、四千数百名の会員たちの募金によるものです。私たちが自負する点は、設備投資を入れると九六％以上が現地に届くということです。皆さんは「そんなことは当たり前じゃないか」と思われるかも知れませんが、大きな団体になればなるほど組織の維持に費用がかかります。極端な例を言うと、名前は挙げませんが、国連の某団体では募金の九割が職員の給与に当てられているほどです。その点、私たちの場合は、ODA（政府開発援助）や国連のプロジェクトなどに比べると決して大きな金額ではありませんが、コストパフォーマンスが非常に高いので、小粒でも数十倍の魅力があると言えます。★

これは有名なカイバル峠。パキスタンとの国境の町ですね。私どもは、この峠のちょうどパキスタン側の麓にあるペシャワールという街を根拠地にして活動を続けています。現地は非常な乾燥地帯で、ほとんど雨が降りません。日本に比べて降雨量は二百分の一ぐらいです。★

日本の人たちになかなか分かってもらえない点を幾つか簡単に言いますと、アフガニスタンの面積は日本の約一・七倍ですが、三分の二以上はこういう高山地帯です。パミール高原から西に延びるヒンズークシュという巨大な山脈が、この国の真ん中にドーンと位置しているんですが、それも並大抵の山ではなくて、五千メートルから七千メートル級の高山がずらりとそびえ立っている。空から見れば非常に美しい光景ですが、日本列島がすっぽり入るぐらいの広大な山脈なんです。

私たちの活動は、この山あいの谷を蟻が這うようにして診療区域を広げな

カイバル峠遠望（手前はパシュトゥン人の村落）

がら現在に至っていますが、いちばん遠い診療地点まで、歩いて優に一週間はかかるというところも珍しくありません。行くまでにとても時間がかかるんです。現地ではその距離を表すのに何キロとか何マイルとか言わずに、「歩いて五日」「体力のある人なら歩いて四日」というふうに、歩いて到着するまでの日数で距離を表します。いま行なわれている一連の政治交渉を見ていると、タリバン側が時間の引き延ばしをしているとか、いろいろ言われていますが、日本なら一日で済むことでも、一週間も二週間もかかるのが普通なんです。★

パシュトゥン人のジルガ（長老会）の様子

イスラム社会というのはいわゆる国民国家とは違って、どの町や村にもモスク、つまりキリスト教でいう教会がありまして、これを中心にして個々の共同体ができている。この宗教共同体は、各地域のジルガ（長老会）が基盤になっていますが、これが権力の基盤でもあるんです。たとえばソ連軍とかタリバンとか、いろんな政治勢力が入り込んでくるときに、これを受け入れるか戦うかといった決定は、各村ごと、あるいは各谷ごとになされるという社会で、いわゆる近代国家とは全く違う世界です。

私たちは主な仕事の一つとしてハンセン病（癩病）を取り扱っていますが、その患者さんが村で迫害されたりしても、警察や裁判所へ行ったり、弁護士を呼ぶわけでもない。じゃあどうするかというと、金曜日にモスクへ行って「人間としてこんなことをやっていいのか」と呼びかけて、人々の良心に訴えるんです。そういう形で事態を収拾する社会でありまして、このへんが日本人にはなかなか分かりにくい。政治的な問題にしても、隣の村が戦っているのに、こちらは何事もないかのように平然としているというようなことも往々にして起きるわけです。★

婦女暴行やセクハラ行為は重罪死刑

これは映画のロケではなくて、アフガニスタンの山村では普通に見られる光景です。大半の人々の生活は百年、二百年前どころか、シルクロードの昔の頃とほとんど変わりがありません。山奥へ行くと貨幣もまともに通用していない、物々交換の地域もあります。そういうところで医療行為を行なう際に苦心するのは、現地の人々の喜怒哀楽の感情を理解することで、医療というのは単に医療技術を施せばいいというものではありません。生身の人間が相手なので、何を考えどんな気持ちで暮らしているのか、どんな理由で悲しんだり喜んだり怒ったりするのかを理解しないと、人間関係の上に立った真の意味での医療行為は行なえません。そういう事情を理解するにはずいぶん時間がかかります。★

貧富の差にはまことに甚だしいものがあります。目下、難民に対する人道援助が盛んに議論されていますが、アフガニスタンからパキスタンに流れて来る人々は実はとても恵まれているんです。パキスタンの北部とアフガニスタンは民族的に見ると不可分一体の地域でありまして、冬はカブール（アフガニスタンの首都）のほうが寒くなるので、金持ちは国境を越えてパキスタンのペシャワールのほうへ行き、夏になるとまたアフガニスタンに戻って来るという季節的な移動がかなりあります。金持ちは途方もない大金持ちで、ちょっとした風邪ぐらいでもロンドンやワシントンへ気軽に出かけて行ったりするんです。

しかし、一般の人々は全然違う。たとえばうちの門衛さんの月給は、日本円でわずか四千円です。逆に言うと、それぐらい物価が安いわけですが、そういうところでは私たちが考えるような医療はできません。我々が苦労するのは、いかに安い費用で多くの人たちに恩恵を及せるかということなんです。日本円で数千万円のお金があれば、年間約二十万人、今年はおそらく三十万人前後の患者を診療できます。★

十七年ほど前に私が現地へ行ったきっかけは、ハンセン病のコントロール計画用の診療設備を充実させるためでしたが、この写真に写っているのはその当時あったすべての医療器具です。数千名の患者に対して入院ベッド数がわずか十六床という状態で、簡単な消毒器具とピンセットぐらいしかないような状態から始めたわけです。真に大切なのは物やカネではないとは言いますが、実際には物やお金も不可欠だということで、ペシャワール会の活動はにわかに活発化していきました。★

こうして私どもの病院は、ハンセン病だけでなく、一般診療を行なう病院にまで成長しまして、ハンセン病の患者がアフガニスタンとパキスタンに少なくとも二万人以上いるという状態の中で、唯一の頼れる病院として診療活動を続けています。こういう写真をお見せすると、確かに医療活動をしていて、私が医者だということが分かりますが（笑）、先ほど申しましたように、私たちの実際の活動は、表には出ない多くのことにエネルギーを費やしてきたというのが現実でした。★

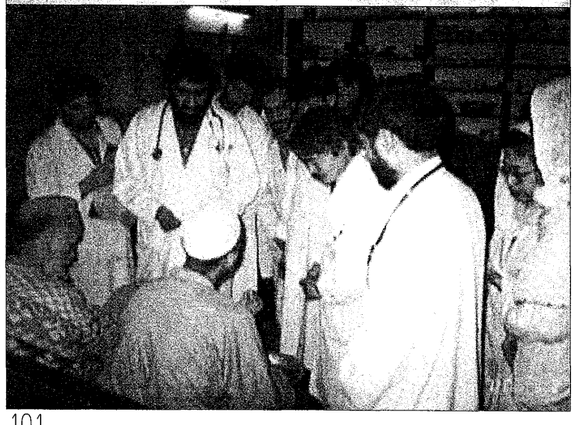
大きなテーマの一つは、現地の人々の風俗や文化をいかに理解するかということでした。困ったのはたとえば女性たち、特に若い女性の診療です。年を取ると次第にイスラム的な規制が緩やかになっていきますが、若い女性が外出するときにはこれ（ブルカ、チャドル）をかぶらないと不謹慎だというのが昔から行なわれてきた現地の伝統的な習慣で、決して最近になってから強制されたというようなものではありません。一昔前の日本女性の和服に相当するものです。しかし、こういう風習は、医療に従事する側にとっては大きな障害になってきます。

というのは、ハンセン病の早期症状は皮膚に出てくるんですが、皮膚の皮疹（発疹）というか、できものの状態を調べるときに、女性の胸やお尻を診たりするのは不謹慎きわまることなん

▶庭から眺めたPMS本院（パキスタン北西辺境州・ペシャワール）※

▶診察を待つ患者たち（PMS本院）※

▶女性病棟（PMS本院）※


▶朝の回診の様子（PMS本院）※

です。ちなみに、現地では婦女暴行や女性に対する性的いたずらは死罪です。かといって、警察が出てくるわけではなくて、住民たち自身が不始末の処理をする。どうするのかというと、地面に体を埋めて、皆で石を投げて殺してしまうというのが普通です。めったにないことですが、今でもときどきそういうことが起こります。

欧米人の偽善的な価値判断の悪影響

女性たちに義務づけられた風習に対する欧米人の一般的な反応は「許すべからざるセクハラの一種である」という強い非難で、しばしば現地でトラブルを起こします。そういう揉め事を起こした人は、ニューヨークやロンドンへ行くとちょっとした凱旋将軍のように迎えられますし、国際会議などでも喝采を浴びるわけです。しかし、私は「では、あなたたちはその女性を連れて帰って面倒を見ることができるんですか」と言いたいですね。彼らは彼らで逃れられない掟の中に生きていて、その制約の中にあっても彼らなりの豊かな喜怒哀楽の情があるわけで、そういう中で幸せな状態をいかにして保障するかというのが私たちの大きなテーマでありまして、現地の風俗を批判しようなどとは決して思いません。

▶女性がブルカ（チャドル）をまとうのは古くからの習慣だ

私たち日本人の生活にしても、自分たちが漠然と思っているよりも実は案外と不自由なもので、職場での制約とか、男性あるいは女性であることから来る制約とか、いろんな制約の中で生きている。そういう中にありながらも、私たちはそれなりに豊かな感情生活を営んでいるわけですが、現地の人々も全く同じことなんです。私たちの基本的な方針は、現地の風俗や文化に対して一切コメントしないということです。私たちは、自分たちの物差しで物事の善し悪しを判断せずに、それはそれとして受け入れるという態度を貫いてきました。★

しかし、女性の診察については、ある程度は外人部隊に頼らざるを得ないということで、十数年前からペシャワール会の女性ワーカー二十名ほどが現地に来てくれましたので、ずいぶん助けられました。彼女たちは、女性患者へのサービスを充実させると同時に病気の発見率も向上させるという、画期的な役割を果たしたのです。★

では、難民の問題に入ります。今から二十二年前の一九七九年十二月、世界最強の陸軍と言われたソ連軍十万人がアフガニスタンに侵攻しました。それ以後今に至るまで、内戦の要因を引きずっていますが、この戦争で死亡した人は約二百万人という数字が出ています。その大半が老人と女性と子供たちで、弱い人たちにシワ寄せがいって犠牲になったわけですが、私たちも、医療の立場から次第に巻き込まれていきました。★

と言っても、当時は自由に活動できるような状態ではなかったので、私たちはソ連軍が撤退する日もいつかは来るであろうと考えて、ペシャワールで人材を育成しながら、内戦が終わるまでじっと待機しておりました。★

日露戦争と広島長崎への畏敬と同情

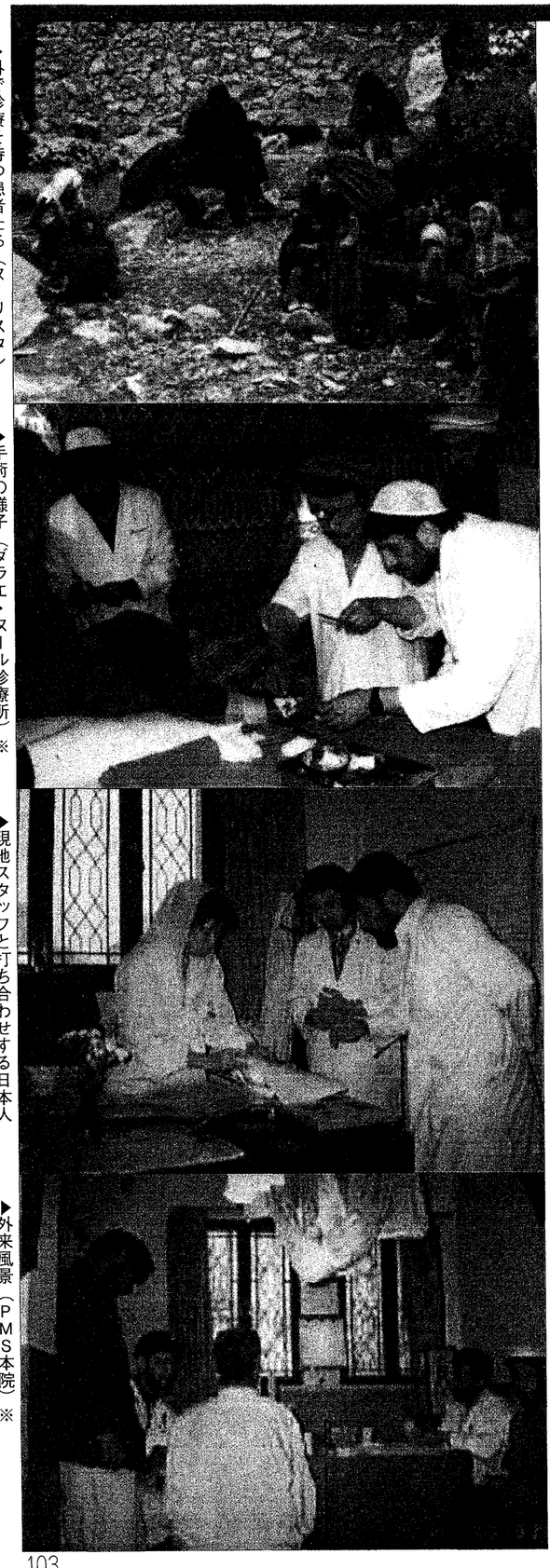
難民キャンプで細々と診療を続けていましたが、それでは割に合わないし、ハンセン病だけの診療ではとても成り立たないというのが当時の結論でした。というのは、ハンセン病が多い地区はマラリアや結核、腸チフス、アメーバ症といったいろんな感染症の巣窟なんです。しかも、そういうところは医者がいない山の中がほとんどなんです。アフガニスタン全体を見ても、無医地区のほうが多いんですが、特に山中の最も恵まれない地区が多い。そこで、将来的には、難民が帰ってきてから一般診療所をそういう地区に開設し、いろんな感染症の一つとしてハンセン病もさりげなく診るという形に大きく転換したわけです。★

当時はまだ農村が戦場でした。アフガニスタンでは地域共同体が個々ばらばらに存在していて、しかも軍隊というか、日本でいうサムライと農民が未分化な社会なんです。だから男たちは村に残って戦い、女性や子供は安全な難民キャンプに送り出す。そういう中で、私たちの活動は現地住民と接触しはじめたわけです。★

道路はまともに通れません。山越えして何日もかけて、どんな人たちが住んでいて、人口はどれぐらいなのか、どんな病気が多いのかということを、何年も足で歩いて調査しました。★

中には、外国人を見るのは初めてという地域もありました。これはヌーリスタンという、アフガニスタンの最も奥地の山中ですが、その村で私は「ドクターはフランス人ですか」と聞かれました（場内笑）。中国人や韓国人にはよく間違えられますが、フランス人というのはさすがに初めての経験でした。わけを聞くと、「外国人が来るのは初めてなんだ」と言うので、「私は日本人だ」と言ったわけです。実は、日本という国は現地では知名度が非常に高くて、どんな田舎へ行っても誰でも知っておりまして、非常な親近感を持っています。彼らが「日本」と聞いて何を連想するかというと、少し話が古くなりますが、まずなんといっても日露戦争（場内笑）、それから広島・長崎です。これはどんな地域でも、どんなに学問のない人でも知っています。現に我々も、日本人だということが幸いして、危険な場面を何度も切り抜けることができました。私は頭は良くないですが、言葉の才能には恵まれていまして、現地の主な言葉はだいたい話せます。そうこうしながら少しずつ住民たちと親交を深めて、調査を進めていったわけです。★

そんな日々を送り迎えているうちに、ソ連軍が撤退し始めました。そうなると、難民たちがどんどん帰ってくるだろうと予想して、世界中から三百ぐらいの団体が押し寄せてきましたが、帰ってくる人たちはほとんどいないような状態でした。逆に、湾岸戦争が始ま



▶外で診療を待つ患者たち（ヌーリスタン地域のワマ診療所）※

▶手術の様子（ダラエ・ヌール診療所）※

▶現地スタッフと打ち合わせする日本人看護婦（PMS本院）※

▶外来風景（PMS本院）※

る頃になると、欧米人を中心とするNGOや国連の団体は、恐怖に駆られてどんどん現地から逃げ出していきました。そういう中で、九一年十月にはソ連そのものが潰れてしまい、やがてアフガニスタンの共産政権も倒れてしまうと、田舎に散っていた政治党派が首都カブールをめざして集結しました。アフガン人の九五%以上は農民と遊牧民ですが、そういう流れの中で農村地帯に伝統的な自治形態が復活するという先行きを、難民たちは非常に正確に読んでいまして、二百七十万人の難民のうち二百万人もの人たちが、九二年五月から十二月までの間に、誰の力も借りずに帰ってきました。★

「反撃したら、私がその場で撃ち殺す」

ところが、はるばる帰って来たものの、家は崩れ落ち、畑は十数年もの間荒れ放題のありさまです。私たちとしては、欧米の団体が撤退した今こそ働き時だと考えて、次々に診療所を建て、難民を迎える形で農村の復興を側面から支援するという方針のもとで、猛烈な活動を開始しました。★

東部の山岳地帯にある三つの診療所はこの頃に開かれたもので、もう十年ぐらい経つかも知れませんが、村落復興の大きな力として働いてきました。ぜひお伝えしておきたいエピソードは、九二年に起きたマラリアの大流行の際の出来事です。クロロキンという安価な薬が効かない悪性のマラリアで、次々に死者が出ました。私たちがカバーできる人口は七、八十万人ですが、我々が死亡を確認した人たちだけで約六千人、もう助かるまいと予想された人々は数万人おりました。

私たちが朝から晩まで必死に働いても、せいぜい二百名から二百数十名が限界です。中には何日も歩いて診療所にやって来る人もいましたが、「申し訳ないけど明日の朝また来て下さい。眠る時間がほしいんです」というぐらい忙しくて、どの診療所も音を上げているような状態でしたが、あるとき、朝まで待っていられない人たちが、死の不安にかられて投石を始めたんです。石ぐらいならまだしもですが、飛び道具まで撃ち込んできた。幸いにもロケット砲弾は当たりませんでしたが、銃弾で二名のスタッフが殉職しました。

これは、私が北部から帰る途中で立ち寄ったダラエ・ヌールの診療所が、住民たちに包囲された際に起きた事件です。日本人には理解しにくいことですが、現地は言わば復讐社会で、たとえば二人殺されたとすると、相手側を二人殺さないと自分たちの名誉が保てない。逆に言うとそれが犯罪の抑止力になっているわけです。あのとき鉄砲を撃った人はおそらく普通のおじさんなんでしょうが、群衆が大変な興奮状態に陥っていたために、どえらい騒ぎが起こってしまった。うちのスタッフは皆、リーダーの中村ドクターが「すぐ反撃しろ！」と指示するだろうと思っていたら、案に反して私は「発砲するな。撃ってはいかん！」と厳命した。すると皆びっくり仰天して、「先生、本気なんですか。我々が皆殺しになっても撃つなと言うんですか」と口々に言うので、私はこう言いました。

「たとえ皆殺しになっても撃ってはいかん。発砲する者がいたら、私がその場で撃ち殺す。我々十数名ごときがここで死んでも、ペシャワールには百名近くのスタッフが控えているんだ。彼らが来て、我々の代わりに治療を継続してくれるだろう。住民たちは今は狂気に陥っているが、それが静まれば必ず後悔する。今この状況を耐え通せば、我々のプロジェクトは継続できる。だが、応戦したら、プロジェクトは壊滅してしまう。その結果、何万人の犠牲者が出るかを考えてみろ！」

悲しみと苦しみを分かち合いながら

幸い、それ以上犠牲者は出ませんでしたが、我々は次の日の朝、その谷で村長会議を開かせました。私は大声で人を怒鳴ったりしない人間ですが、このときはさすがに逆上いたしました。

「我々は朝から晩まで、何の政治的な意図もなく懸命に働いているのに、昨日の暴力は何事だ！　首謀者を差し出すか、あるいは君らが本当に診療所を必要としているのなら、治安を守れ！」

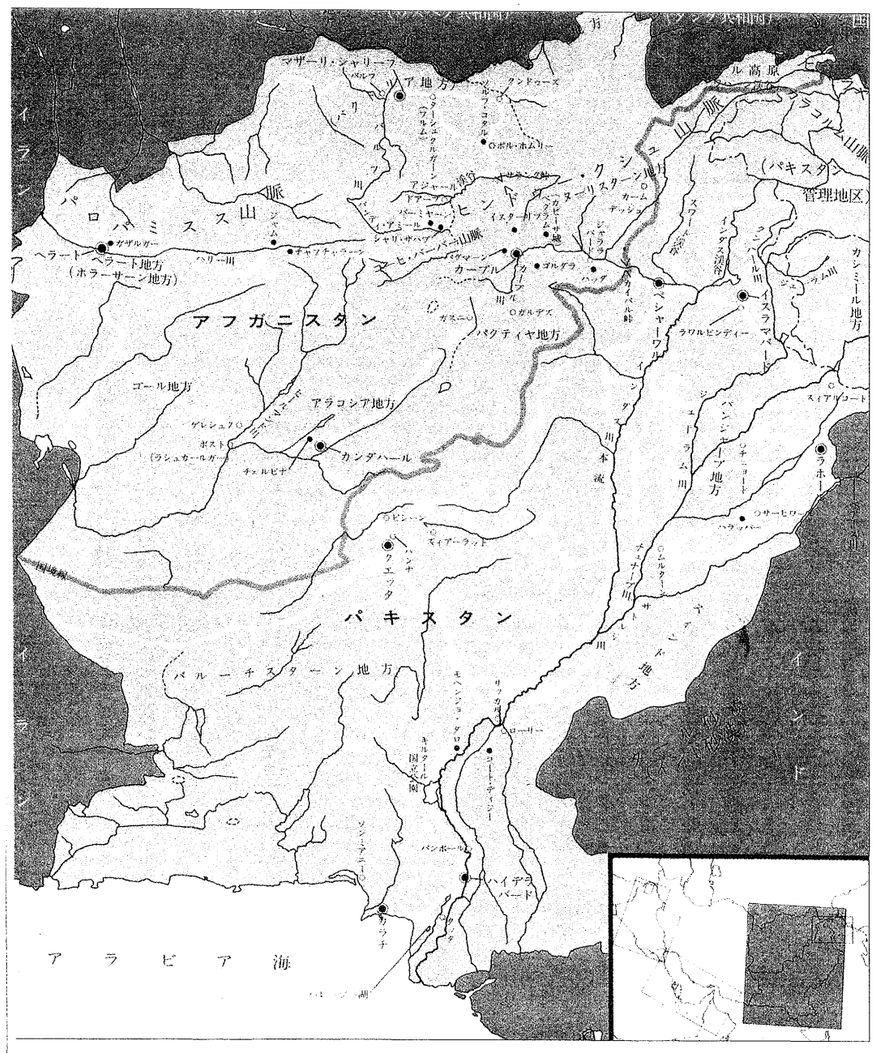
と強く言うと、彼らは平謝りで「なんとかしますから、どうか頑張って診療を続けて下さい」と言うものですから、こちらも「薬のほうは任せておいていただきたい」と答えました。それからまた必死で山越えをして、ペシャワールから福岡の本部に「ありったけの銭を全部送ってくれ」と泣きついたんですが、ペシャワール会というのはなんとも不思議な団体で、昔から自転車操業なんですね（場内笑）。本部が「せいぜいもう三十万円ぐらいしかありません」と言うので、「三十万でいいから全部送れ」と言いかけて、思わずゾッとしたのは、そのお金でいったい何人救えるのかということでした。

当時、キニーネという薬は一人分が二百二十円でしたから、三十万割る二百二十で、千四百人しか助けられない。つまり、あとの人たちは、気の毒だけど死んでもらわなくちゃいけないわけです。人の命は本当に平等なのかと、私はそのとき思いましたですね。しかし、あらためて現地の事情を訴えると、たちまち二千万円の募金が集まりまして、この資金で薬を仕入れて村から村を回って病気を潰して歩いた結果、マラリア騒ぎもやっとのことで収まりました。こうした医療活動を通して、私たちはアフガニスタンの東部で絶大な信頼を獲得していったわけです。★

道路のある地区はまだいいほうです。本当に困っているのは、歩いて行かないとたどり着けないような地域が多いので、我々は今、アフガニスタンでもパキスタンでも、奥地へ奥地へと診療活動を徐々に拡大しているところです。口の悪い外国の団体は「中村は山が好きだから山奥に入っていくんだ」などと言いますが（場内笑）、とんでもない誤解です。彼らが行こうとしないから我々が行くのであって、誰でも容易に行けるような場所なら我々は行きません。そういう地区では他の誰かがやるでしょう。必要性があっても誰も行こうとしない地域で、誰もやらないことをするというのが私たちの一貫した方針です。★

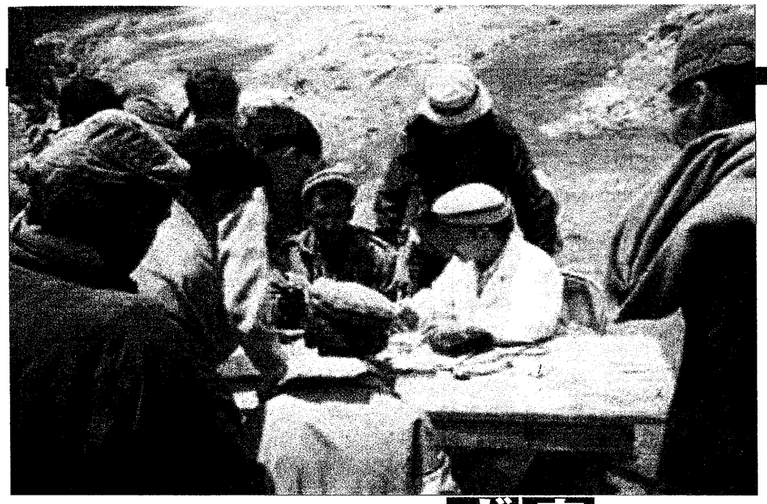
これは奥地の診療所の様子ですが、ちょっと説明のしようがないですね（場内苦笑）。「現地における医療活動にもいろいろありまして」と言うしかないぐらい、設備がほとんどありません（場内笑）。ペシャワールやカブールで立てた計画も実行できないのに、ジュネーブや霞が関で立てた医療計画にどんな現実性があるのかという世界なんです。細々と診療を続けながら、現地の人々と悲しみや苦しみを分かち合いつつ努力する中で、何がこの人々にとって、そして自分たちにとっていいことなのかを模索している段階なんだと思います。★

そうこうするうちに十五年が過ぎましたが、これでは二十年でも三十年でも終わらない。なにしろ先は長いので、一応十五年間で第一期を終了させるこ



とにしました。そこで三年前に期限を区切り、それまではバラバラになっていたパキスタンとアフガニスタンの医療計画をPMS、「ペシャワール会医療サービス」という名前で統合し、七千万円を投じて病院を建設しました。これもすべて、ペシャワール会会員の募金によるものです。★

次の三十年間に備えるべく三年目が経過したところでしたが、現地は本当に難題の多いところで、一昨年からは大旱魃に襲われていますし、昨年は「患者が非常に多いので調査に来てくれ」と頼まれまして、久しぶりにアフガニスタンへ行ってみると、患者のほとんどが赤痢なんです。ひどい下痢が続いて、幼い子供たちが次々に亡くなっていくという状態でした。半日かけて子供を抱えてきたお母さんが外来に来ても、患者が二百人もいると、列の後ろで待っていなければなりません。その間に冷えていく子供の体を、母親が途方に暮れながらじっと抱いているという姿が普通に見られました。



病気の治療よりまず生き延びること

すでに昨年五月の段階で、WHO（世界保健機関）をはじめとする国連機関はこの大旱魃に対して警告を発していましたが、アフガニスタンを中心にパキスタン西部やイラン、イラク北部、中央アジア全域から北朝鮮、中国西部で被災した人々は約六千万人にのぼります。中でも最も被害の甚だしかったのがアフガニスタンで、被災者は約一千二百万人、飢餓線上にある者が四百万人、餓死線上にある者は百万人という数字を挙げて警告を発し続けてきました。一年後の今から見ても、これは決して誇張された数字ではありません。空腹の末に栄養状態が悪化して抵抗力がなくなり、病気にかかって死線をさまようというレベルの犠牲者も入れますと、飢餓に関連した死亡者数が約百万人というのは誇張ではなかったと思います。★

しかも、旱魃で作物がとれないだけでなく、水が涸れていくわけです。これは私どもにとっても経験のないことで、作物がとれないだけなら蓄えを食べて生き延びることができますが、飲み水がないと家畜も死んでしまいます。そういう中で、人も家畜も同じ泥水を啜るという状態に置かれたからこそ、下痢による子供たちの犠牲者が大量に発生したわけです。家畜が死にはじめると、農民たちは村を離れていきますが、アフガン人の九五%以上は農民と遊牧民ですから、これは致命的な事態です。農民は家畜が死ぬ前に村を離れるか、あるいは家畜を売り払って次々に難民となり、国内の大都市に集中していきました。★

私どもとしましては、患者がいないことには医療は成り立ちませんから、医者が言うべきことではありませんが、「病気なんか後で治すから、ともかく生き延びていなさい」というような状態でした。とにかく清潔な飲み水を確保しようということで、全力を挙げて診療所周辺からアフガニスタンの東部一帯に展開しまして、六百六十カ所の地点で現在も井戸掘り作業を続けていますが、そのうち五百数十カ所で水が得られています。この水で命をつなぎとめられている人々は約三十万人にのぼりますが、こうした水源のおかげでかろうじて餓死が食い止められているような状態でして、そこに、米軍の報復爆撃が始まったわけです。★

援助どころか、来たのは国連制裁措置

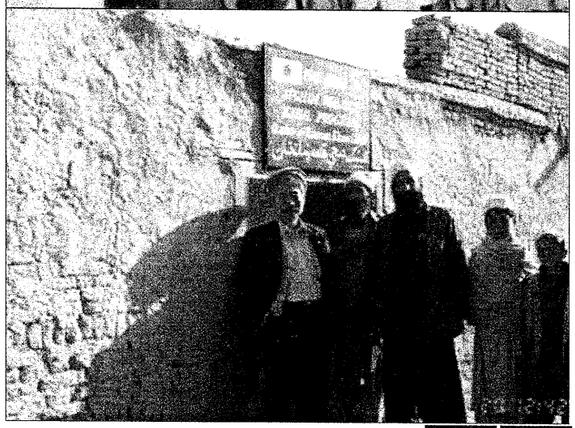
中には半日がかりで往復して水を運ぶ人もいますが、そういう状態ではどうしてもいろんな病気になりやすい。なにしろ貴重な水ですから、食器を十分に洗えないので、食器が汚染されやすいんです。こういう瀕死の惨状の中で戦争状態に突入した。これが庶民の暮らしの実態です。★

私たちも必死で水源を確保しながら、地域によっては農業用水と農業水路を復興し、地下水を導き出して畑を潤そうと努力しました。中には、その甲斐あって、住んでいた土地が砂漠化して逃げ出していた一万数千名の難民がまた戻ってくるという奇蹟的なことも起きました。しかし、これは例外的なケースです。★

水が出ると、もちろん皆喜びます。井戸掘りの苦労について今は話しませんが、私たちはこんな具合に住民と一体になってこの事業を進め、ウソみたいな話ですが、小さなNGOの努力によって少なくとも三十万人の人々が難民化せずに済むという状態を維持してきたのです。★

水源プロジェクトを開始した当初は、我々が頑張っていればこの惨状は必ず世界に伝わるはずだと信じていました。百万人単位で人が死んだり飢餓状態に陥ったりしているんだから、国際援助は必ず来る。それまでは我々が頑張るんだという思いで事業を続行していたのですが、援助どころか、来たのは国連制裁措置でした。理由はよく分かりませんが、国連制裁が発動されたのは今年の一月か二月のことです。初めは飢饉状態に置かれた国に対して食糧の輸入も制限するという方針が打ち出されていましたが、国連機関や世界食糧計画（WFP）が猛反対した結果、さすがに撤回されました。政治的な理由はどうあれ、アフガニスタンの一般民衆はほとんど見捨てられてきたというのが偽らざる現実です。

▶外で診療を待つ患者たち（カブール診療所）※



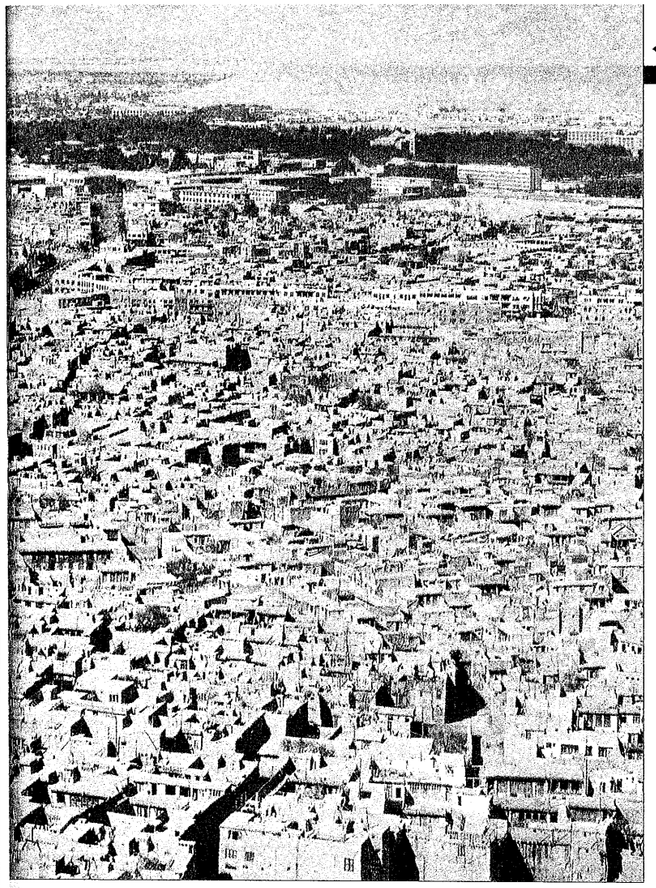
▶中村医師と現地スタッフら（カブール診療所）※

"難民"になれる人々は恵まれている

国連制裁に対する報復を恐れた欧米人たちは、そのたびに続々と撤退していきました。実は今、首都のカブールは国内最大規模の避難民を抱えています。その数は百万人から百五十万人にものぼっていまして、「全市が巨大な難民キャンプ」と言ってもいいような状態なんです。その中で、まともに診療できる施設は国際赤十字とイタリア系の病院だけしかありません。ところが、両方とも戦闘による外傷だけしか診ません。一般の人たちに開かれた病院はほとんどないのが実情で、なんとこの百万都市は無医地区の状態に置かれているんです。

そういうわけで、私たちは今年の三月からカブール市内五カ所に診療所を開き、年内に十カ所まで拡張しようとしていたんです。そこに報復爆撃が開始され、我々は現地に行けなくなりました。しかし、連日の爆撃の中でも通信は途絶えていません。数日おきにスタッフをペシャワールに帰らせて現地の状況を報告させていますが、彼らは普段と全く変わりなく、朝八時に出勤して午後三時まで診療するという活動ぶりで、市内に取り残された人々に大きな希望を与え続けています。★

私たちの十七年半の活動を振り返り、こうしてお話ししていると、困った人や哀れな人々を助けに行ったということで、大変な美談のように聞こえますが、実はこの活動を通して救われたのはむしろ我々の方ではなかったのか、という思いにかられます。遠い異国の地で無理をせず、日本で静かに医療に従事していれば、それなりの生活はで



◀カブール市全景。手前側は泥レンガ造りの旧市街

きたでしょう。しかし、現地では辛いことも少なくありませんでしたが、そこで苦労してきたおかげで、人間が本当にあるべき姿、と言うとちょっと大げさですが、人間にとって何が本当に大切なのか、追い詰められたときに人間は一体どうなるのか、そういうとき本当に人間らしいものとは一体何なのかという意味で、非常に大きな収穫が得られたような気がします。

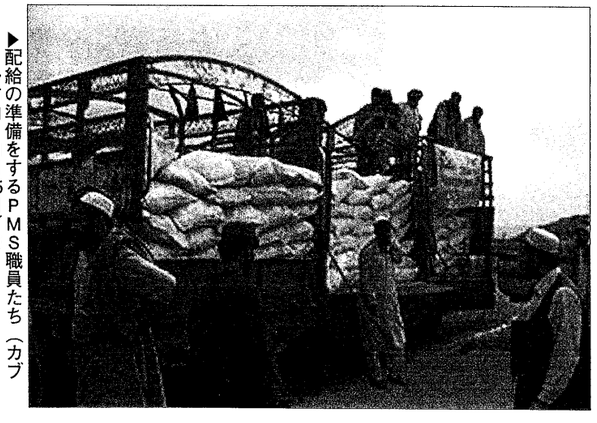
先ほども触れましたが、〝難民になれる人たち〟はごく僅かなんです。新聞などでよく使われる「難民」という言葉に我々は騙されがちですが、現在〝難民〟としてパキスタンのペシャワールにいるのは、一つは季節的に移動している人々なんです。夏は涼しいアフガニスタンのカブールにいて、冬はペシャワールで過ごすというのが普通の生活パターンの人たちで、季節的に移動する人口がかなりいます。

それから、カブールは今ほとんど仕事がないような状態なので、家族を養うために職を求めてペシャワールに来る人たちがいます。彼らは難民キャンプには住まないで、親戚の家に身を寄せているのが実情で、現にうちの病院のスタッフの四分の三は、厳密に言うとアフガン人の難民です。しかし、日本の人々が想像するような難民というのはごく僅かなんです。だから悲惨ではないというのではなく、〝難民にもなれない人々〟がほとんどなのです。

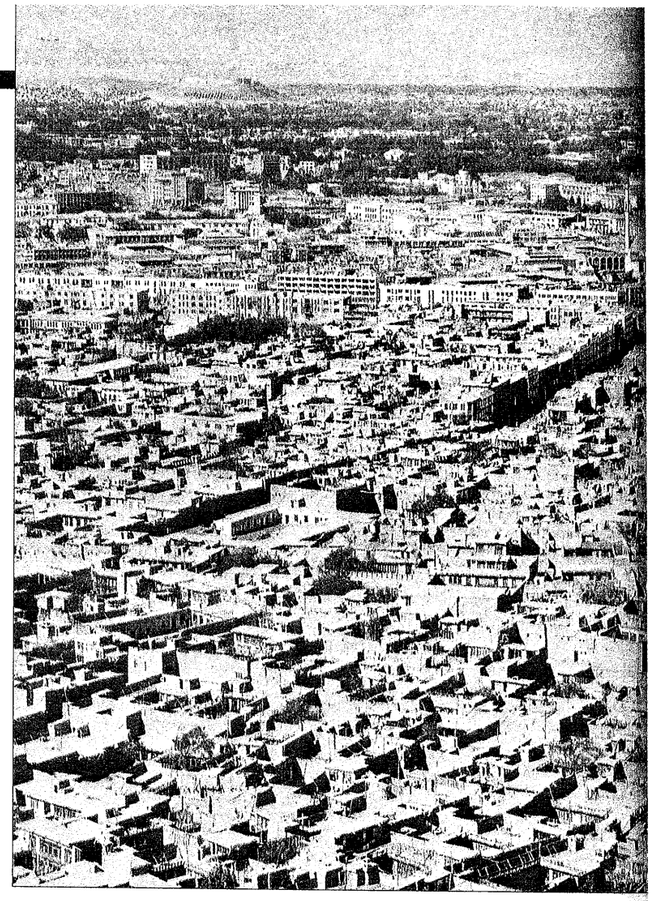
首都は巨大な難民キャンプと化した

難民になるには資金が必要です。旅をするお金と、国境を通過するとき役人に払う賄賂がないと難民にはなれないのが現実で、このままの状態で厳寒の冬が来れば、カブール市民百数十万人の一割は確実に死ぬ、生きて冬を越せないだろうと我々は見ています。ですから、薬も非常に大切ですが、今はまず餓死を防ぐのが先決問題で、二週間ほど前からカブールへの大規模な食糧輸送計画を立てまして、先週から本格的に輸送が開始されました。現在、約四百八十トンがペシャワールからジャララバードを経由してアフガニスタン国内に搬入され、昨日の報告ではその三分の一ほどがカブールに向かったということです。

今は餓死者を少しでも減らすことが緊急の課題だろうと思います。カブール市内では、難民にもなれない人が約一割、ざっと見積もって十数万人がただ死を待つばかりという状況です。しかし、我々の計算では、日本円で二千円あれば一家族十人が一カ月間、冬を過ごせます。厳冬期が三カ月として、六千円あれば生きて冬を乗り切れるんです。今はとにかく食糧の輸送が先だということで、ペシャワール会では大規模な食糧配給計画を開始しているところです。



▶配給の準備をするPMS職員たち（カブール市内・11月15日）※



こういう仕事は、本来は世界食糧計画（WFP）やUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の領分ですが、彼らは今はとても動きがとれない。輸送しても配布の方法が分からなくて、パキスタン側で腐っている小麦粉がたくさんあるんです。送りつけられた大量の食糧を目的地までなかなか運べないという状況の中で、ともかく私たちとしては、巨大な難民キャンプと化しているカブール市内から一人の餓死者も出さずになんとかして冬を越させたいという思いから、必死で食糧の輸送に努力しています。私たちはこの十七年半の間、徐々に活動範囲を広げてきましたが、現地は本当に難題が絶えないところです。

日本の識者は現実の重みを知らない

今回、日本に帰って来て驚いたのは、まことに不確かな情報をもとにして、妙なことがたくさん起きている。とても理解できないようなことが日本中で起きているということでした。その一つは「正義の味方アメリカ」対「悪の権化タリバン」との対決という図式が皆の頭の中に刷り込まれ、これをもとにして洪水のような報道が行なわれ、判断がなされているということです。アフガニスタンなんて実際に見たこともない人たちが、こうするべきだとか、けしからんとか、盛んに議論しているのを見ていると、一抹の不安を感じないわけにはいきません。先ほど私は、冬を越せずに百万人以上の人が死ぬだろうと言いましたが、現地の修羅場にいると、とても単なる数字で表せるようなものではない。

六千人もの人々が亡くなった阪神大震災の惨事を振り返ると、大変だったなと思うでしょうが、実際に起きた事態の悲惨さは数字で表せるものではありません。神戸、あるいは今回ニューヨークの人々が体験した、あるいはそれ以上のことが今、アフガニスタン全土で起こっているんです。それなのに、現地の実情も知らずに、あたかも将棋の駒を動かすかのように、単に政治的な動きを二流西部劇のような調子で議論するというような風潮に、私は一抹の不安と、怒りにも似たものを感じます。私のつたない報告がどれだけ役に立つか分かりませんが、これでひとまず終わらせていただきたいと思います。ご静聴、ありがとうございました。

（盛大な拍手）

質疑応答

――米軍による空爆が依然、続いていますが、アフガニスタン国内は今どうなっているのか、中村さんがご存じの範囲内で話していただけませんか。

中村　現在伝えられている報道のニュースソースに注意するようにして下さい。日本人に届く報道は情報源が限られていて、北部の民衆と関係が深い「北部同盟」と、一部の難民たちの情報だけで判断させられているわけです。タリバン政権側の発表もありますが、彼らは裏表のない人たちで、言わなきゃいいことまで言ってしまう。ですから、実際に何が起きているのか、本当のところは伝わっていないわけです。私たちは毎日向こうから定期的に報告を受けていますが、人々の関心は、いかにしてこの冬を越すかということに

向けられています。極端に言えば、タリバンが天下を取ろうと北部同盟が天下を取ろうとかまわない、とにかく生き延びたいということです。

それから、こう言うと誤解される方も多いでしょうが、タリバン政権が登場してきた背景には、北部同盟がかつて共産勢力を倒してカブールを占領したとき、二万人以上の人がわずか二、三年の間に死んだという事実がありました。現地の人々は、そういう混乱を収拾してくれる「秩序ある勢力」としてタリバンを自発的に受け入れたというのが真相でありまして、北部同盟が入ってくるのをカブール市民は非常に恐れていたんです。

アフガンの民衆は現実を知っている

中村　北部では、市民たちはタリバンに協力して戦闘にまで参加しました。しかし今回、タリバンの根拠地のカンダハルは徹底的に攻撃されたので、ここでは秩序が失われて一部は難民化していますが、これはごく局部的な動きです。難民の八割以上はペシャワールに入ってきていて、ごく一部は南のほうのチャマンやクエッタに流れていく。全体として見ると、難民化の動きは無視できないにせよ、非常に少ない。大部分の人は逃げることもできずに留まっているというのが現実です。

彼らの切実な願いはとにかく生き延びることで、ほしいものと言えば水と食べ物と平和な生活だけなんです。だからこそ、タリバンが皆に受け入れられた。タリバンの政策には確かに行き過ぎもありますが、食料と平和には代えがたい。宗教的な戒律がいくら厳しくても、彼らの定めに従っている限りは安定した秩序の実現が期待できるということで、皆に受け入れられた政権なんです。

こういうふうに言うと決まって、「先生はタリバン派でしょ」と言われますが（場内笑）、これは厳然たる事実でありまして、市街戦や婦女暴行、略奪が横行するカブールの大混乱の中でたちまち秩序を回復したのがタリバン勢力で、これを人々が受け入れたんです。各地域の人々（ジルガ＝長老会）がよく話し合い、タリバンならこの混乱を収めてくれるだろうと見て受け入れた。それが、十万のソ連軍をもってしても制圧できなかったアフガニスタンを、わずか一万五千名のタリバンがコントロールするようになった理由です。

「タリバン政権下のアフガニスタンには言論統制があるじゃないか」とか、よく言われます。「ビラでもまいて事実を知らせれば、民衆はすぐに立ち上がるはずだ」とかですね。しかし、日本人以上に現実を知っているのはアフガン人自身でありまして、彼らの情報源はイギリスＢＢＣのパシュトゥー語放送です。国営放送もよく聞かれていますが、これはあまり信用できない（笑）。アメリカの動きはＢＢＣを聞けば分かるし、アフガニスタンの動きは彼ら自身がよく知っています。自分たちの置かれている立場を世界で最もよく理解しているのは、おそらく一般のアフガン民衆でしょう。そういう意味では、各種の報道によって誤ったアフガン像が伝えられ、結果的に世界中が誤解を余儀なくされているわけです。あえて意図的とは言いませんが、誤った世界像を抱いているのはむしろ日本人のほうなんです。

▶首都カブールを制圧した北部同盟軍の兵士たち（11月13日）

——タリバン政権が支持されている理由は理解できました。しかし、北部同盟なども含めて各勢力の実態が今ひとつ不透明で、はっきり見えてこないのですが。

中村　アフガニスタンの権力構造は、日本や欧米諸国のような先進国とはずいぶん違っていまして、極端に言うと各地域がそれぞれ割拠しているような状態で、たとえば札幌の人間は札幌さえ安全であればいい。隣の青森県が戦っていたって自分たちには関係ない、といった感じです。各地域ごとに重要な決定がなされるのがアフガン社会の特徴ですが、全体的に言うとタリバンが敷いた秩序は概ね歓迎されています。

人道援助が聞いて呆れる米国の狂気

中村　大勢の餓死者が出た上に大規模な空爆を受けて、タリバン勢力が弱体化した地域では秩序が乱れていますが、我々は今でもカブール市内に食糧を輸送しているし、市内の診療所もいつも通りに運営されています。皆がタリバンを支持しているからこそ、そういうことが可能なんです。しかし、それは決して、タリバンがいいとか悪いとかいうような問題ではなくて、人々の平和を願う切実な気持ちを背景にして初めて彼らの政権が成り立っているということで、今のところ目に余るような略奪行為も起きていません。

食糧倉庫が幾つか襲われたという情報がありましたが、私が確認してみると、カンダハルの食糧倉庫の中には食糧がたくさんあるのに、外国人の責任者は逃げて行って門衛だけしかいないという状態で、その倉庫の外には飢餓に苦しむ人が大勢うろうろしていた。それを知ったタリバン政権が倉庫を開けて食糧を秩序正しく彼らに配り、それから扉を閉めたというのが実態です。それを略奪行為と言えば確かにそうなんでしょうが、怒った群衆が倉庫を壊して中にあるものを盗み出したというわけではない。タリバンの支配が崩れた地域では、そういうことも起こり始めているようですが、九割方以上の人々は以前のような混乱状態を望んではいません。だからこそ、消極的にせよ、タリバンの秩序がきちんと保たれているというのが偽らざる現実なんです。

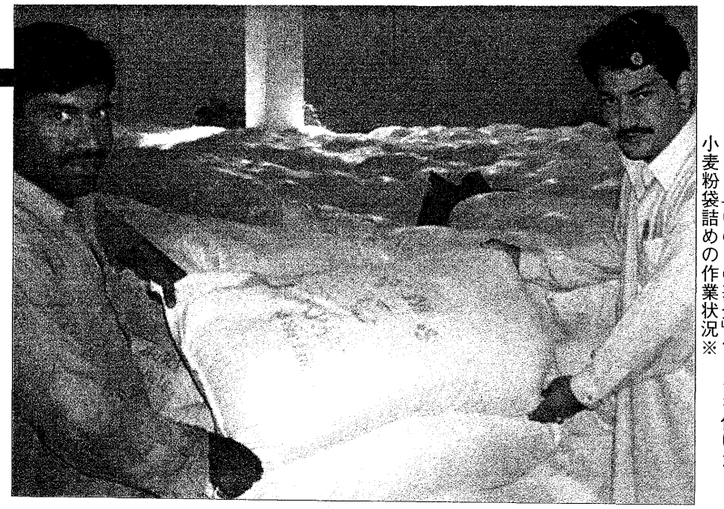
——地域によっては、北部同盟も一定の支持を得ているわけですか。

中村　北部同盟は、ほとんど支持されていないはずです。北部同盟の構成メンバーはかつての暫定政権のメンバーで、共産政権の崩壊後に起きた内戦でかなり酷いことをやったからです。ロケット砲まで投入された市街戦ではたくさんの犠牲者が出ました。特に、日本人と顔がよく似たウズベクやタジクの部隊は、一般居住区を無差別に乱射して何万人も死なせているので、カブール市内に北部同盟が入ってくることを人々は非常に恐れています。新聞を読んでいると、タリバン政権崩壊後の新政権作りに関する記事が盛んに出てきますが、それほど簡単なものではありません。数年以上かかる困難な問題だと思います。

——米軍は爆弾を落としながら食糧も投下しているようですが、どんなふうにしてそれが難民の人たちに届くのか、とても不思議で、恐ろしいことだと思います。投下される食糧は一体どうなっているんでしょうか。

中村　米国が投下している食糧については、北部同盟の一部で皆が喜んでいるような映像が流されましたが、私たちが関与しているジャララバード周辺の東部の地域は激しく爆撃されまし

▶イラン国境近くの難民キャンプで警備に当たるタリバン軍兵士



◀PMS「いのちの基金」マークを付けた小麦粉袋詰めの作業状況※

た。昔、ゲリラの軍事施設があったのは事実ですが、ここも爆撃の標的になって、我々が水源計画に関わっていた地域でもたくさんの村が被害を受けています。食糧も落とされましたが、住民たちは気味悪がって、荷を開けようともしないのです。タリバン当局の指示で廃棄される場合もあるし、住民自身の判断で穴を掘って埋めたり捨てたりしています。いずれにしても、そういう食糧を食べてはいません。

日本の自衛隊が送った食糧も、アフガニスタンに届く前に廃棄されました。というのは、現地の人々の口に合わないからなんです。敗戦直後、戦勝軍が日本でチーズをばらまいたようなもので、欧米人好みのものが現地の人たちに好まれるとは限りませんし、食糧の中身にも問題があります。そもそも現地では、豚を食べてはいけないという厳しい禁忌があるんです。どんな缶詰を送っても、豚の脂が入ってるんじゃないかという疑いがあるだけで、誰も食べようとしない。羊や牛の肉でも、普通はお清めをしてから処理した肉しか口にしないんです。そういうわけで、ほとんどがイスラマバードの段階で廃棄されているわけです。そこで私が「現地の事情も知らずに、なぜ自衛隊機を飛ばして食糧を送ったりするのか」と言うと、「中村は政治的だ」と言われます。事実を述べると、そういうことを言われるという風潮が恐ろしい。この数カ月間で、日本という国が急速に変わったような感じがして、非常に不気味な感じがします。

食糧援助にしても人道援助にしても、すべてがどうも変なんです。武器で脅してもダメだからという理由で行なわれるような性格のものが、本当に人道援助なのかと私は言いたいですね。親切や人助けというものは、それ自体で価値がなければいけません。親切を施したうえで政治的な見返りを求めた段階で、「人道」という言葉自体が自己矛盾に陥って、もはや人道的ではなくなります。援助してもなびかないなら武力を行使するぞというのでは、人道援助などとは全く言えないわけで、爆弾と一緒に食糧を投下するなどというのはまさに論外だというふうに感じますね。

一方的な報道に騙されてはならない

——いろんな報道が錯綜している中で、テレビで中村先生のお話を聞きまして、かなり心が静まりました。いま私たちにできるのは募金ぐらいですが、ほかにも何かあれば教えて下さい。

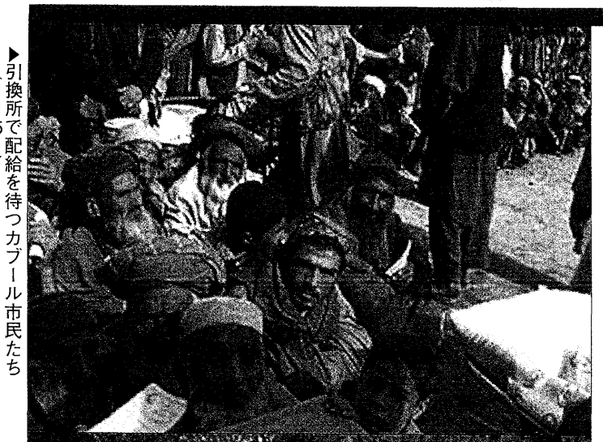
中村　いろんな角度から、情報が次第に集まってくると思います。そうなれば、いま日本人が抱いているアフガン像は徐々に変わっていくはずです。今はまだ、太平洋戦争が始まったときに「一億挙げて火の玉だ！」と熱狂したのと似たような興奮状態が続いていますが、差し当たって必要なのは、一方的な報道に惑わされずに、信憑性を疑いながら事態の推移を注意深く見守ることです。何か役に立つことがしたいとお考えなら、私たちが情報を送り続けますので、わずかでも募金していただければ大変にありがたいと思います。ただ、私たちが提供できるのは医療の現場から見た情報で、全体的なアフガン像ではありません。それを正確に伝えるには、真に専門的な知識が必要になってきます。

ただ、私たちがはっきり言えるのは、皆さんの善意のすべてを百%、現地に届けられるということです。一億円から二億円ほどあれば、カブールからジャララバードの被災地まで、かなりの範囲をカバーできます。私たちの組織は非常に小規模ですが、コストパフォーマンスは非常に高い。我々は、少なくとも東部アフガニスタンにおいては、自分の箱庭の中のように自由に動き回れるという利点があるので、今どの地区が一番困っているのか、どこに届ければいっそう喜ばれるのか、ということを熟知しています。カンダハルとかヘラートとか、もちろん全部は知りませんが、アフガニスタンの人口の大部分が密集している東部の地域については、どの組織よりも実のある活動ができると断言できます。

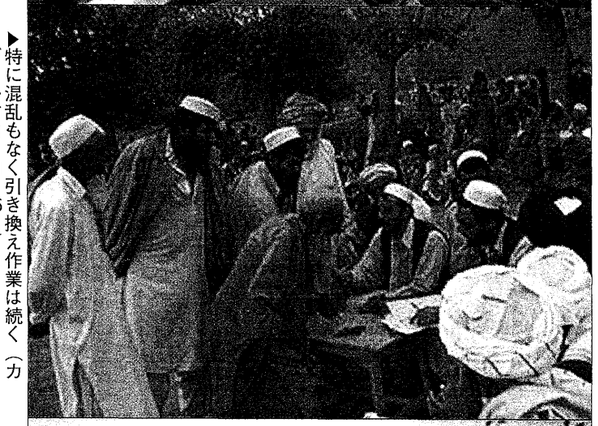
——カブールまで食糧を輸送しているというお話ですが、米軍の誤爆なども含めて安全性が心配です。それから、西へ向かい始めたと伝えられている山岳部の奥地の住民は冬を無事に越せるんでしょうか。もう一つ、アフガニスタンという国の性格なんですが、内戦が長年続いていることや、村単位で重要な物事が決められるという点、そして凶作のダメージを受けやすいといった点から見ても、日本の戦国時代に近いような感じがするんですが。

中村　食糧輸送に関しては、タリバン政権がしっかりしている限りは大丈夫だろうと思います。いちばんの問題は「地上の移動部隊を攻撃する」と公言している米軍の動向で、輸送に要するスピードは、空爆による道路の破壊状況に大きく左右されてきます。今のところは米軍も、さすがにそこまで攻撃する意図はないようですが、あと一カ月ちょっと経つとラマダンというイスラム教の断食月がやって来ます。この時期には普通は戦争も致しません。そんなことをしたら、ほかのイスラム諸国からも強く非難されます。ですから、最悪の場合は、ラマダン中に大量の物資を現地に送り届けることで切り抜けられるのではないか。不幸にして輸送が不可能になった場合には、カブールの難民の八割以上はジャララバードに流れてきているので、その段階で打つ手があるだろうと見ています。

難民たちの二割ぐらいは、カンダハルからクエッタに流れていくというのが通常の流れです。西のほうへ行こうとしても、イランは完全に国境を閉鎖していて通れない状態なので、あとはもうペシャワールしかない。そういうわけで、皆ペシャワールをめざしてパキスタンに入っていく。難民たちはその前にジャララバードに移るでしょうから、物資を運んでさえいれば、ジャララバードでも食糧の配付を実施でき



▶引換所で配給を待つカブール市民たち（11月15日）※



▶特に混乱もなく引き換え作業は続く（カブール市内・11月15日）※

▶配給トラック用の垂れ幕「PMS日本・アフガニスタン食糧配給計画」※

▶PMSのスタッフと地元の人々が協力して配付（ソルフロッド郡・10月30日）※

ると思います。

それから、奥地の状況については、我々の本領は山岳地域を自由自在に歩き回るということで、奥地のほうはまだ水も欠乏していませんし、収穫もそれなりに上がっているので、二年も三年も戦いが続けば徐々に欠乏を来たしてくることが予想されますが、今のところはかなり持ちこたえられそうです。先日、うちの日本人の若いスタッフが、皆が山中に逃げ込むようなことになったら一体どうしたらいいのかと言いますので、私は「井戸掘りができなくなったら、君らは山の中に入って山村耕作隊として頑張ってくれ」（場内笑）と言った。でも「工作」と勘違いされたので、「そうじゃない。字が違う。田んぼを耕すんだ。山村耕作隊で頑張るんだよ」（場内笑）と言ってやりました。

日没時に祈りを捧げるアフガンの人々

自給自足体制はある程度は可能です。現地では、水田を作らない場合はトウモロコシを作りますが、小麦は水が少なくても栽培できるので、自給自足体制に十分耐えうる作物です。精強なソ連軍が撤退を余儀なくされたのも、山岳地帯での頑強な抵抗に悩まされたからです。我々自身が立てこもって戦うわけではありませんが、私たちは自給自足体制を確立するべく山村耕作隊として頑張りたい（笑）。そういう形で自立を促すような支援は十分可能だろうと思います。

今のアフガンの国情を日本の戦国時代と同様のものと見るのは、ちょっと語弊がありますね。どちらかというと戦国時代に近いんですが、アフガニスタンというのは元来、三十以上もの民族から成る複合民族国家なんです。最も人口が多いのはパシュトゥンという部族で、約七〇％ほどですが、パシュトゥン族以外の者に「君はどこから来たのか」と聞くと、たいていは「アフガニスターン」と言います。つまり、「アフガニスタン」という同一性は確立されているわけで、その点で日本の戦国時代とはちょっと違います。

アフガンと我々の未来は不可分一体

中村　ザヒール・シャー王が一九七三年前後に追放される以前は、言わば日本の天皇制に近いような状態でした。ですから、ザヒール・シャー王ならば国家統一のシンボルとして迎えてもよろしいというのが、大方の部族の考え方です。ただし、ザヒール・シャー王が自分たちのジルガ（長老会）の意思決定を経たうえで自発的に来るのでなければいけない。ちょっとややこしくなりますが、言わば日本の戦国時代からさらに下って幕末の攘夷運動も関係してきます。つまり、攘夷運動と戦国時代と天皇制が一緒になって出てくるわけですね（場内笑）。

品のない言い方をすれば、南蛮・毛唐たちのせいで大和の国が滅ぼされ、しかも天皇陛下まで国外に連れ去られてしまったというのが、今のアフガニスタンの普通の人たちの自然な感情だと思います。ましてや新たな南蛮・毛唐に天皇陛下が連れて来られるのでは我々はとうてい従えない、というのが九九％のアフガン人の思いでしょう。だから、北部同盟にもアフガンを統治できるような可能性はありませんし、ザヒール・シャー王が外国あるいは国連から担がれた形で帰ってきてもとても従えない、という意見が必ず出てくるような状態なので、このままではアメリカは次第に底無しの泥沼にはまっていく、というのが正しい予測だろうと思います。

アフガニスタンの未来が私たちの未来と切っても切れないものだということは、いろんな角度からよく見れば分かるはずです。なぜ先進国の強大な国々が寄ってたかって、あんな死にかけた弱い国を潰そうとするのか。その理由をずばり言えば、現在の金融資本体制を守りたいからです。私は社会主義者でも何でもない（場内笑）、ただのリベラリストですが、今回の紛争にはカネがカネを生む資本主義社会と、中央アジアの伝統的な社会の対決という側面があると思います。地に足のついた農業国家と極度に都市化された世界の対決、という言い方もできますね。

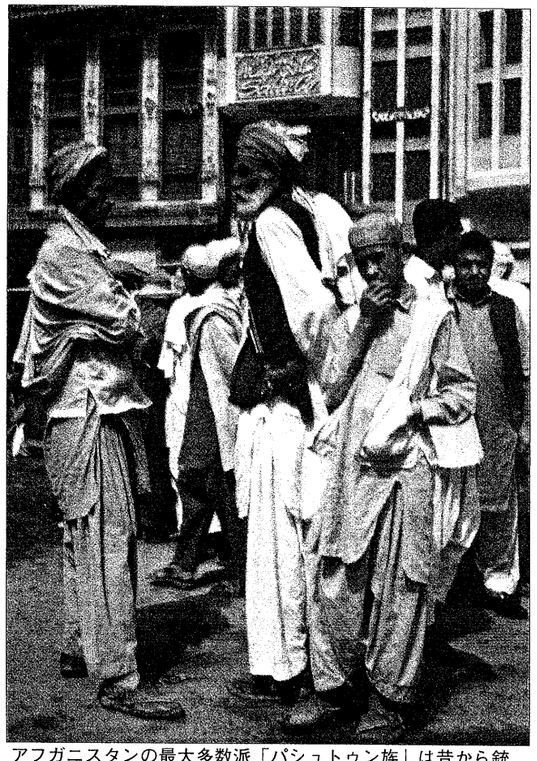
アフガニスタンの行方は、めぐりめぐって日本の将来と非常に関係が深いと私は見ています。かといって、我々の生活が全部ダメなんだということではありません。我々だって一定の社会体制の中で生活しているわけで、それをいきなり否定するようなことを言われれば、誰だって反発します。そうではなくて、いま何が人間にとって本当に必要なのかということが問われている。それに向かっていく途上に、何らかの希望があるような気がします。

何と言いますか、従来から続いてきた枠組みが破綻することを、特に若い人たちは決して恐れてはいけません。終戦直後の、戦後の生活の実態をご記憶の方も大勢おられると思いますが、当時のような混乱状態の中でも、ヤミ米を食べながら人々は立派に生き延びているわけです。そういうことを考えますと、もう既存のものを死守するようなことはやめて、何が起きても驚かずに、この事件の行く末をじっと見守ることが大切だろうと思います。モノがあればあるほど、何かみんな暗くなる（場内笑）。何もないほうが、よっぽどすっきりしますよね（場内笑）。モノがあればあるほどそれを守ろうという気持ちが働くから、どうしてもそうなってしまいます。

「アフガン」が世界に提起する大問題

中村　なぜアメリカのような超大国があんな小さな国を相手に大騒ぎしているのかというと、先ほども言いましたが、彼らにはどうしても守らなければならないものがあるからです。それを守り抜かないと、世界中の経済システムが崩壊してしまうような何かがとても大切なんです。てなことを今頃言っても始まりませんが（場内笑）、そういう現実を見据えた上で、我々の行き先というものを考えるべきだと思います。いわゆる先進諸国は地球温暖化などについて盛んに議論してますが、その犠牲になっているのは、まさに今のアフガニスタンなんですね。地球温暖化の影響で雪がなくなり、氷がなくなる。アフガニスタンの乾燥地帯で住民たちを養っているのは、冬に降り積もった雪が夏に融け出してできた地下水が作り出す川なんですが、その貯水槽がいま消滅しつつある。これは実に恐ろしいことでありまして、戦争よりも恐ろしい。この状態が数年続くと、アフガニスタンの大半が砂漠化してしまいます。そうすると、一千万人以上の人たちが生活空間を失います。

お互いの小さな違いをめぐって争わないで、もっと大きな目で見て共通の課題として取り組むべきものは何なのかということを、アフガニスタン問題は世界に向けて提起しているのではないか。いろんな角度で眺めながら、よく考える必要があると思います。歴史的に見ると日本の戦国時代と天皇制と幕末の攘夷運動、さらにはフランス革命と、いろいろ混ざり合ったような形ですが（場内笑）、そういう中で、タリバンというのは一種の〝水平主義〟


アフガニスタンの最大多数派「パシュトゥン族」は昔から銃器類を常に携行している（ペシャワールで）

の運動なんです。大地主たちを追放したあとで、物事をいかに平等に行なうべきかという視点から、彼らはイスラム平等主義というものを掲げたわけです。ソ連崩壊以降のアフガニスタンでは、イデオロギー的な基盤はイスラム主義以外にはありえません。

「偉大な日本軍がまさかそんなことを」

中村　それにはいろんな要素が含まれていて、〝イスラム原理主義〟という言葉が暗示する宗教的なカルト集団というような概念では、とうてい捉えられないほどの深みを持っているんです。しかもその行く末は、私たちの未来とも深い関わり合いがある。私は「これは終わりの始まりである」ということをはっきり申し上げておきたい。片寄った報道や言論に騙されないように注意しながら、目を凝らして物事の真相を見極めることが大切だろうと思います。

――日本の首相がアメリカへの追随を宣言したことで、日本に対する敵意が生まれていないかと思うと、とても心配です。国境では賄賂を渡さないと通れないというお話がありましたが、ペシャワール会の食糧はこの先もカブールまで安全に届くんでしょうか。

中村　対日感情には微妙な変化が表れ始めています。ペシャワールで初めて米軍の空母の映像を見たときは、日の丸をつけた海上自衛隊の船が一緒についてくるという話で、「これは一体どういうことだ。日本までアメリカを助けてるのか」ということで、現地の人たちは皆ちょっと落胆しておりました。自衛隊の派遣について、元中佐の軍人だったうちの事務長に感想を聞いてみると、大笑いしまして、「それは冗談だろう」と。「いやしくも天下の日本軍が、難民キャンプを造りにわざわざこんなところへ来るわけがない。そんなことをしたら笑い者になるだけだ。それは、日本の評判を落とそうとするアメリカの陰謀に違いない」（場内笑）と言いましたが、そういう見方は私も正しいと思います。本当に自衛隊が来たとなると、間違いなく恥をかくでしょう。しかし、日本に帰ってきてから国会でそう言うと、「その言葉は取り消していただきたい」と言われました（場内笑）。ともかく、対日感情にはやや陰りが見えてきましたね。

ペシャワール会の食糧輸送についてはちょうど昨日、カブールにトラックが三台着いたという朗報が届きましたので、もう本格的に始まっていると思います。ジャララバードでは、爆撃されたのは軍事施設だけではなくて、全く関係のない村も大きな被害を受けています。私はそこで井戸を掘っていたのでよく知っていますが、その村では全滅に近いぐらいの数の死傷者が出ました。百数十名が死傷したという地区が幾つもありまして、私たちはそういうところにも重点的に食糧を配っているところです。

タリバンと農民の見分けはつかない

中村　我々は、カイバル峠で賄賂を渡したことはありません。それどころか、むしろ値切り倒しています（場内笑）。ペシャワールからジャララバードまで、十九トン積みのトラック一台で普通は六千ルピー、日本円で一万二千円ぐらいです。国境線を通過するとき、「我々は善意の募金を集めて活動している小さな団体で、欧米の有名な組織とは全然違うんですよ」と言いますと、向こうの人もそのへんは涙もろいというか、よく協力してくれまして、四千ルピーまでまけてくれる（場内笑）。パキスタン政府としても、疫病神みたいな難民を抱えたくないので大歓迎、大いに協力的なので、今のところ国境は無事に通過できています。

――アフガニスタンの人たちはタリバンやビンラディン、アルカイダにどんな感情を持っているんでしょうか。

中村　先ほども申しましたが、アフガンの人々はタリバンが平和と秩序を守ってくれる限りにおいて支持するのであって、ある州では、退去を求めるというような動きも出ています。しかし、それはあくまでも一部地域の動きであって、タリバンがいなくなることによって秩序が崩壊することは誰も望んでいないというのが実態です。

ちなみに、タリバンと一般民衆は非常に区別しにくい。タリバン当局が徴兵した場合、兵士となるのは一般の農民なので、ますます判別しにくいわけです。私が井戸を掘っていたとき、ダラエ・ヌールというところに鉄砲が無造作に置いてありました。タリバンは普通、支配下の地域でいわゆる刀狩りを行ないますので、思わず私が「危ないじゃないか。こんなところをタリバンに見つかったらどうするんだ」と言うと、井戸の底から「おーい、ちょっと待てよ。パトロールの時間だから、今から出ていくぞ」と声が聞こえてきた。つまり、その人がタリバンの一員だったわけですね（場内笑）。

そういう話があるぐらいで、一般の農民とタリバンの区別はなかなかつきません。ですから、村ぐるみ全部殺してしまわない限り、タリバンを全滅させることはできない。アルカイダのメンバーだけを潰していこうとしても、まず無理です。切り立った山岳地帯に彼らが隠れた場合には、米軍はいったいどうするつもりなのか。潜伏地点の推測がある程度ついたとしても、偵察衛星ではっきり確認できるものではありません。しかし、一般の人々の対アラブ感情は必ずしもよくないです。大きな声では言えませんが、「実は迷惑してるんだ」と言うはずです。

ちょっと話が飛びますが、我々ペシャワール会のほうがタリバンよりも活動の歴史が古いんです（場内笑）。参考までに申し上げると、アルカイダという組織の母体は、内戦中にアフガニスタンに入って来たアラブ義勇軍なんですが、その義勇軍にはワッハーブ派というイスラム教の一派が多かったんです。それから、これも大きな声では言えませんが（笑）、我々自身、まあ一つの軍事勢力だった時期がありました。しかし地元住民には、アラブ人であれ欧米人であれ、外国人がそういう形で入って来るのは許し難いという気

ベトナム戦線に投入された米軍ヘリ部隊

持ちがあって、ある州では地元の軍隊とアラブ軍の戦いが続いたこともありました。対アラブ感情は必ずしもよくないのです。

真の強者は暴力の行使を否定する！

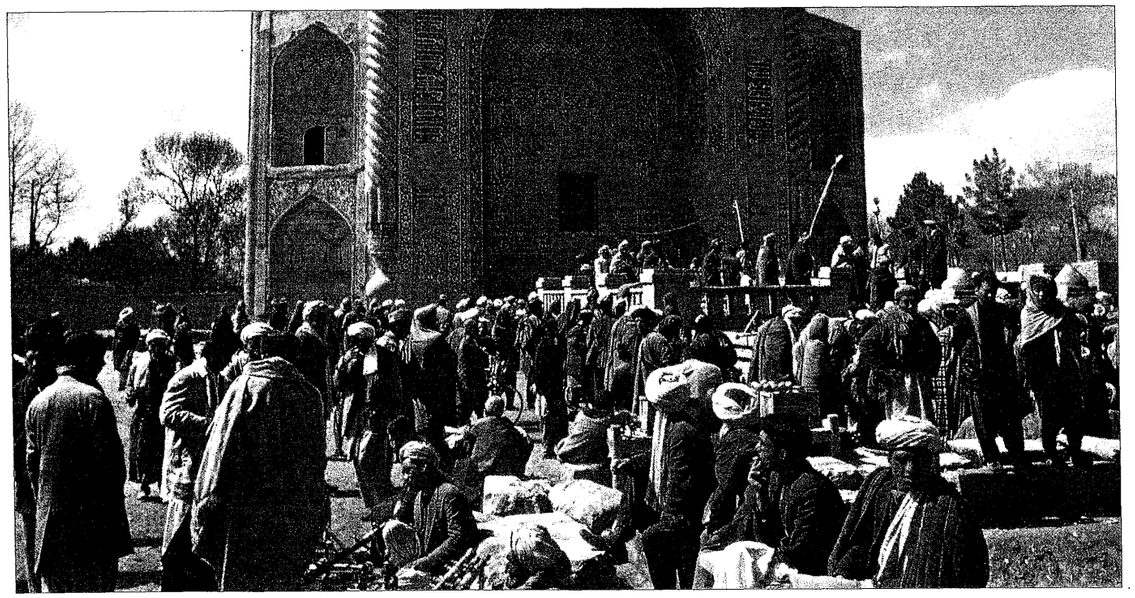
中村　現地の社会はいわゆる法治国家ではなく、強固な掟を守ることによって維持されている社会です。人間関係の主な要素は二つありまして、一つはいわゆる復讐法。つまり、「目には目を、歯には歯を」というものですが、逆に言うと、これが犯罪の抑止力になっているわけですね。もう一つは「客人歓待」の風習で、たとえ敵であっても逃げて来る者はかくまいます。「窮鳥、懐に入れば猟師これを守る」という掟が徹底して守られている社会なんです。それが崩れると信頼性が失われるほど重大な掟でありまして、「ビンラディンさんはお客様だから」というのは現地では大変な説得力を持っているわけです。我々も、そういう掟の中で守られたという体験が何度もありました。これは地域の文化と密接に関係することですが、今では誰もがアラブ兵の存在を迷惑がっていて、自発的に出て行ってほしいというのが本音だろうと思います。

――アメリカは今、炭疽菌によるテロ事件で大騒ぎになっていますが、真犯人が分からないにもかかわらず、それを理由にして、ベトナム戦争で大量の枯れ葉剤をまいたように、今度はアフガニスタンで細菌類でも散布するんじゃないかと心配なんですが。

中村　やるでしょうね、それぐらいのことは。ソ連はアフガン戦争で化学兵器を使っています。ご指摘のように、アメリカはベトナム戦争で大量の枯れ葉剤をばらまきましたが、細菌兵器が使用されたという噂もあります。今のアメリカの極度の興奮状態は、自分がやれば必ずやり返されるということから来る怯えの現れではないかと思います。本当に強い人は暴力の行使を否定します。弱い者ほど吠えたがると言われますが、まことにその通りでありまして、アメリカは、自分たちがこれからやろうとしていることに対して怯えているという面もあるように思います。

かといって、日本までそれにつられて、怯えて吠えたり参戦したりするべきではありません。アメリカが生物化学兵器を使うかどうかという点について、私は専門家ではないからよく分かりませんが、それぐらいのことはやっても不思議はないと思います。私たちは現地で病気の治療をしていますので、細菌の染色なんかもやるわけです。私がはっきり言えるのは、結核菌やマラリア原虫の染色技術を学ぶのにやっとの国が、炭疽菌を兵器化するのは不可能だろうということです。

（10月24日・札幌で収録）



★アフガニスタンの政情変化に伴うペシャワール会の活動

アフガン いのちの基金 現地最新報告

ご承知のように、去る十一月十三日にカブールが北部同盟によって占領され、アフガンの政情はますます混乱を加えています。会員の皆さまの中には「今後のペシャワール会の活動はどうなるのか」と不安に思う節もあるので、私たちの今後の計画についてお知らせ申し上げます。

まず、いかなる権力交代、政情変化があっても、私たちの基本方針はいささかも変わらぬことを言明致します。この十八年間、さまざまな闘争や権力の変遷がありましたが、アフガンの人々に密着した活動には決定的な影響がなく、少しずつ拡大発展してきたいきさつがあります。今回の政変は、過去の動乱のひとコマですが、「いのちの基金」はこのような混乱期であればこそ、日本国民の良心を示す力として有効に活用して参ります。

とはいえ、戦場に等しい状態で吾が職員を危険にさらすことを避けるため、多少の修正はやむを得ないと判断されます。当面、以下を実施いたします。

①カブール情勢は混沌として、先の見通しが立つまで今少しの時を要する。また、国民の三分の二を占める多数派民族パシュトー系の人々が虐殺を恐れて東部へと移動している。大半はラグマン州やジャララバードに移動中である。カブールには食糧をはじめ、豊富な物資が各国政府や国連団体から入る可能性が強まったので、食糧配給の重点をこれら迫害から逃れてくる貧困な避難民に置く。現在ペシャワールで買付け・輸送を準備していた残り約三千五百トンを、あわせて干ばつ地帯や爆撃被災民と共に、これに配給する。

②東部の干ばつ地帯でペシャワール（パキスタン領内）への難民を出さぬ努力に全力を投ずる。即ち、農業および飲料水源の確保事業。既設のPMS（ペシャワール会医療サービス）各診療所を拠点とする医療活動の充実。

③ペシャワール会＝PMSは翼賛団体ではない。各国NGOや国連機関とは協力関係を保ちつつも、援助ラッシュには基本的に参加せず、より困窮する地域と人々に対し、長期的展望で有効な支援を続ける。ニーズは無限大であるが、「いのちの基金」は末永く日本国民の自発的な良心の力として実事業に投ぜられる。政治や宗教的立場を超え、真に良心的な復興・救済事業をアフガン住民、なかんずく軽視されやすい弱者を重視して進めてゆく。国民の募金者に実績を定期的に報告する。

具体策は、ここ数週の動きを見ながら決定し、第二次計画の実施に移る。

2001年11月13日（火）PMS病院長　中村哲（ペシャワール会ホームページより転載）

中村哲先生のこと

佐藤耕造　徳洲会専務理事
福岡徳洲会病院名誉院長

中村哲先生とは、私が八二年に福岡徳洲会病院の院長に赴任した時、前院長から引き合わされました。彼が、パキスタンのペシャワールにあるミッション病院のハンセン病棟に派遣されることが決まった頃です。彼の友人や知人が「支持する会」をつくって応援を始めた時期でもありました。この集まりが、後に「ペシャワール会」に発展していきます。

中村先生は精神科医です。向こうに行けばハンセン病だけでなく、様々な病気の治療をしなければなりません。そこで福岡徳洲会病院で前院長が、アルバイト兼研修という名目で、彼を受け入れていたのです。私もまた、それを受け継ぎました。一方で彼は、岡山のハンセン病の専門病院や東京の結核専門病院、イギリス・リバプールの熱帯医学研究所などで研修に励んだのです。私個人は単純に、人のしないことをするのはいいことだから、できるだけ協力しようと思いました。

向こうに行った中村先生からの最初の手紙には、現地の生活状態や医療の貧困さが、切々と綴られていました。

徳田理事長は現地の様子をただ見るだけでは忍びがたく、徳洲会として協力しました。また徳洲会の有志は、今でも個人的に応援を続けています。

彼は、ハンセン病治療のためにペシャワールに渡ったのですが、その他の病人を診ないでいる医師ではありませんでした。また、何かが先生をパキスタンに引きとめています。

マラリアの大流行があれば治療に奔走し、大干ばつには医療よりまずきれいな水がいると言って、医療の他に各地に井戸を掘るプロジェクトを立ち上げています。そして現在、アフガンの空爆の中で、飢餓を防ぐための活動を開始しているのです。（『徳洲新聞』10月29日号）

◆本特集を組むに当たり、ペシャワール会事務局並びに石風社、『徳洲新聞』編集部ほか関係者の皆様のご協力をいただきました。記して感謝致します（編集部）